

Title	Simiand, F.: Les fluctuations conomiques longue priode et la crise mondiale.
Sub Title	
Author	小高, 泰雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1934
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.28, No.2 (1934. 2) ,p.253(73)- 261(81)
JaLC DOI	10.14991/001.19340201-0073
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19340201-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

究に長年月の歴史を有する我國に於て、斯かる意味での學問的著作さへ存して居らぬといふことは、頗る遺憾であると言はねばならない。

最後に邦譯に就て言へば、翻譯上非常に困難を伴ふ可き本書の如きが、頗る嚴密なる監修の下に其の全譯を完成し得た事を欣びたい。支那音の發音に従つて歐字に綴られた頗る多くの人名、地名、書名、官名、熟語等を、一々漢字に改めるだけでも非常な苦心であつたと譯者の言つて居ることは充分首肯される。更に之に加へて引用文献の夫々に就ての穿鑿や、アジアの農業テクノロジーに關する譯語の苦心や、又重要な術語に對して獨逸語のルビを附した周到さ等、その拂はれた努力が異常なものであつたことが推測される。譯文が場所によつては、餘りに嚴密を期したためか却つて難澁の嫌があるといふことや、支那の地名、人名等に對して嚴格な考證が拂はれて居るにも拘らず、例へば揚子江の揚が上卷を通じて全部楊と誤記されて居るが如き(下卷では揚となつて居る)、そいふ細かい瑕瑾は見出され得るであらうが、それにも拘らず、此の科學的勞作に對する苦心の翻譯が、我國に於ける支那經濟社會の學術的研究、同時に我國自體に關する社會經濟史の研究上に資する所甚だ大なる可きは固より疑ひの餘地を存しない。其點に就て譯者の努力は充分に報ひられて居るものと言つてよい。吾々は更に本書の續編(第二卷)が原著者によつて一日も早く完成され、且つ本書に於けると同様に優秀なその邦譯が一日も早く吾々の机上に置かれる日を期待して筆を擱くことにしやう。

(一九三四—二二稿)

Simiand, F.: Les fluctuations économiques à longue période et la crise mondiale.

小 高 泰 雄

歐洲大戰以後既に景氣變動の所謂循環論的研究は現實的妥當性を制院せられてゐたが、此度の世界恐慌に際會して、かゝる研究に立脚する諸理論は、孰れも、恐慌前根本的缺陷を暴露するに至つた。而して、循環論的景氣論が世界恐慌を解釋する爲めに採つた態度の、一つの大ひなる傾向として我々は長期循環或は波動説が稱へらるゝに至つたことを看過し得ない。其の最も代表的なるものとしてカッセルの研究があり、(The supply of gold. Interim report of the Gold Delegation of the Financial Committee, League of Nations 1930, Annex v.)それを補足するキチンの研究(Supply of gold Compared with the prices of commodities. Interim Report of the gold Delegation of the Financial committee, Annex XI.)ロントラテーザ(Die langen Wallen der Konjunktur)の研究がある。更にシュムペーターも亦(The world depression 1931)に於いて技術の發展と結び付けた長期波動説を述べてゐる。この研究は既に恐慌前アフタリオン、ミチェル、クズネツツ等に迄見られるが最近一層強められ、新なる循環論の發展の方向を暗示するものゝやうである。ここに述べやうとするシミアンの前掲書も亦かゝる傾向に合流する一研

究である。其の研究はシミアン自身を述べてゐるやうに、未だ完成せられたものではないが、從來の所謂循環論的研究の更生を約束する一勞作となり來ることに就いては疑ひ得ないことと思はれる。

本書は著者が l'Institut des Hautes Etudes de Belgique の主催に於いて、前掲の如き題名を以つて一九三二年三月行ひたる講演を要約して出版したものである。而して其の内容を見るに、同著者もこれを認めてゐるやうに (p.134) 餘りに、煩雜であり、且不完全にして、單に長期波動説としての一章案を提供してゐるに過ぎぬのであつて、従つてこれに對して、批評を下すことなく、單に其の内容を紹介するに止め、他日一層完成せられた勞作の發表をまつて、再吟味したいと考へる。さて、其の内容は二つの研究より構成せられてゐる。一は十八世紀末葉以降の經濟長期波動 (des fluctuations économiques à longue période existent, et importantes, contraires même, dans le développement économique moderne et contemporain) 他は、該長期波動説を根據としての現世界恐慌の批評である。第一章「長期經濟的變動に關する概要」に於いて景氣研究に對する彼の方法論的態度として、恐慌を觀察し、理解する爲めには、事物の客觀的、數量的、證明的を件つた理論に據るべきであつて、かゝる前提を無視した個人的な傾向を極力避くべきであるといふ。而して、經濟生活全體を反映する中心的な要素であり、しかも、客觀的に數量的に表明し得るものは結局物價指數に外ならぬ。物價指數が如何なる變動を表示してゐるかを觀察し、其の變動を理論附けることによつて、景氣論を構成しやうとするのである。扱、卸賣物價運動は彼に従へば、一つの變動傾向を示してゐる。一は、十年を週期とする短期波動であり、他は長期或は準永久的波動である。かゝる長期波動は、謂ふ迄もなく、水準の相對的に上騰してゐる局面 (A 局面) と、これと反對なる B 局面とより構成せられ、十九世紀の初葉以來一般的に觀察し得る迄に明瞭に現はれてゐる。其の振巾期間に於いては多少の例外は存するが、主要諸國

間には大體一致してゐると見られる。又、商品間の價格運動には各、特殊性が在存して居り従つて景氣徵候上に多様性を持ち來すけれども、然し、それあるが故に却つてこれを全體的綜合的立場から觀察することは有意義となる。さて、彼のいふところの A 局面は、十九世紀末葉より大戰後に及ぶ (1789-1815-1820) 期間、十九世紀中葉より七五-八〇年に及ぶ期間、十六世紀の初葉より十七世紀の稍、中葉に至る期間がそれであり、これを繋ぐものが B 局面なりとする。かゝる物價變動は一見明瞭なる事實ではあるが、これを利用する以前に他の社會的經濟的諸要素がこの變動と何等かの同時性を以つて變動してゐるか否かを知ることが肝要である。先づ非經濟的事實を参照するに、一般に考へられてゐるやうに、この變動は、工藝技術上の秩序とか、政治制度、人口上の事實とは何等の關係もない。これに反して、社會的諸運動、道德的事實、殊に、經濟的犯行は B 局面に特に多く、次に、人類間の大運動、大移民、大戦争は寧ろ A 局面に多い。然しかゝる非經濟的事實との相關性は、これに先行する經濟的諸事實によつて條件付けられるのである。然らば經濟的事實とは如何なる關係に立つか。先づ、經濟組織或は、經濟機構の發展を見るに、其の最大の特徴をなしてゐる交換經濟の擴張は、A 局面よりは B 局面に於いて最も大なる發展を示し、更に又、他の特徴である農業に對する工業活動の増進も、又、より生産的な生産制度の發展も共に A 局面のものでなくして、B 局面のものである。勞働組織の發展は、A、B 兩者間に異つた態様を以つて、共に現はてゐる。然るに彼によれば斯様な諸事實或は經濟生活上の諸機關の種々なる参加は、そのものゝ中に A・B を生ずる本源の自足的運動を包含してはゐないのであつて、従つて他の要素によつて更に條件付けられるに外ならぬと謂ふ。(p. 23) そこで、經濟生活の機能上の事實に眼を轉ずる。生産活動の内面に存する生産費及價格の經濟的要素は各々 A 局面に於いて上騰し、B 局面に於いて下降してゐる、生産費中重要な部面である工賃は、A 局面に於いて全體とし

て上騰するけれども、而も生産價格以上には上り得ない。これに反して、B局面に於いては、價格の下落は急激であつて、賃銀以上に下落する。これが、労働の経済的利用、機械の利用を促進する原因である。次に分配の局面に於いても、所有財産上の富及所得上の富は孰れも、A局面に於いて増大し、B局面に於いて減少してゐる。然して、これ等生産及分配上の諸變動は結局するに物價變動によつて支配せられてゐると見らるべきである。(p. 29) 私經濟と公經濟的との長期間に亘る特徴的變動は共に、等しい様に觀察せられ、而して、其の變動の支配的なものは同じく物價變動に外ならぬ。又國民的な種々の集團間の經濟關係經濟政策を考察するに、長期間に於いては、等しい變動が現はれてゐる。即ち國際交換の發展は、A局面では分量よりは寧ろ單に價值(value unitaire)の運動として、B局面に於いては分量の加速的運動として現はれる。次に經濟政策に、就て見るに、Aに於いては、交換上の便宜は極度に押し進められるに反し、Bに於いては壓迫と防護とが強制せられてゐる。而し此等の事實も條件付けるものではなくして條件付けらるゝものに外ならぬ。次に生産と消費との關係を見るに、Aに於いては使用上の要求によつて超過せられる生産の實現が、Bに於いては使用を超過する貨物の處分が生ずる。然らばこの交替は何處より来るか。この説明の爲めに彼は最後に經濟組織の一般的機能的事實として貨幣的事實に到達する。彼は貨幣的事實を科學的に研究するが爲めには客觀的な具體的な貨幣數量として取扱ふことを要するとし、これが爲めには、有効なる貨幣的手段全體を包含するとともに、これに更に流通速度其の他の條件を加味する。該數量は全體的には増大するも、A局面に於いては其の速度を早めB局面に於いては、其の速度を減ずる。この事實は正に物價運動と符合してゐる。而して、彼は貨幣數量説に従つてこの符合を依存關係に迄發展せしめる。然し、彼は、それが單純なる貨幣數量説に立脚するものではなくして次の諸點に於いて特色あるものなりとする。即ち、彼の證明は單なる兌換

券のみではなくして不換紙幣をも包含してゐるとともに、更に、Aの初期及Bに於いて常に明に貨幣手段數量は物價に先行してはゐるが、これによつて其の依存關係は自動的直接的には現はれてゐない。即ちAに於ては物價の上昇度は貨幣手段數量よりは低い、それは貨物取引量が流通速度及び價格と同時に増加するからである。又Bに於いて物價は貨幣手段數量よりは斷然低下するが、それは後者の増加のゆるきに比して取引量が増加するからである。

要するに前述の如き生産、分配其の他の經濟的諸關係の運動に對して物價運動は先行してゐるけれども、物價運動に對して先行するものは貨幣運動であるが故に、長期波動の究極の原因は後者にもとめんとするのである。

從て、次に、この先行的貨幣運動の分析に這る。先づ法外なる紙幣發行の場合は別として、更に又、貨幣用金が經濟以外の方法を以つては流入することのない即ち鑛山を所有してゐない國家を想定する。茲に於ては銀行や企業が獲得する金は生産的に使用せられる。其の用途は主として、長期に亘る生産財或は原料生産に投ぜられる。而して、かゝる刺激を受ける生産部門は信用の増大によつて事業活動を増大し、更に他の部門に迄波及し、價格は全般的に騰貴することとなる。利潤は一般的に増加するも最初の部門に於いて最高である。生産費は急速には昇らず、他の部門への販賣は一層高い價格を以つてせられるからである。この勢を阻止するかに見える生産費高と、消費販路の縮少は、それ自體或る程度の制限を持つもので利潤は依然高騰を續ける。然らば非經濟的金流入は如何といふに、この場合には消費財に對する需要となるが、この部門より逆に生産部門への需要を増大する。結局、金の増大は總て生産活動を増大せしめる。次に不換紙幣の増發は如何。もとより相當の限度を有するものとしての條件のもとにはあるが、その場合にはこれを生産的用途に使用すると、非生産的用途に用うるとを問はず、前述の場合と同様に經濟活動を旺盛ならしめる。宛も戰爭に於ける場合の如きがこれである。次にB局面であるが、この局面で

注意せられるのは、經濟活動を推進する要素即ち金利の低落があるに拘らず、經濟活動が壓迫せられ回避せられることである。この事實はA局面と關聯して次の様に考へられる。A即ち好況局面にあつては前述の様に商品が一定の價值を以つて一定の數量の販賣せられることを條件として利潤の増加があつたのである。それが實現せられざる限り、「虚偽の門」に立つものである。この終局の販賣を豫め行はしめ、従つて企業を擴張せしめる手段は貨幣或はこれによつて支持せられる信用による外はない。然るに貨幣は應て收縮し、信用も亦收縮するに至る。すると、生産者商人孰れも其の商品を急速に販賣することを要し、價格は下落せざるを得ぬ。價格下落を防止する方法は、「生産制限二、外國の競争を排除する保護政策があるが何れも所期の目的と反對の結果を招來する。」

結局するに彼は貨幣手段の各A・B局面に於ける増加減少を以つて長期波動の第一要因とし、これより發して他の一切のA・Bに現はるゝ諸特徴を説明しやうとするのである。而して經濟的進歩は此等兩局面を通して現はれ来る。「二層多くの貨物の生産と所得の増大と價格の絶對的相對的低落」の中にもとめらるべきである。これがA・B兩局面を通して現はるゝことは特に注意すべきである。例へばAに於ては積極的な即ち生産に附隨した利益は増大するが、他面所得の増大は寧ろBに於いて見らるゝ。

第二章に於ける問題は長期波動としてのA局面とB局面との轉換期として現世界恐慌を觀取しやうとするのである。先づ問題となるのは物價指數であることは謂ふ迄もない。彼は謂ふ。ある論者は、かゝる長期波動の轉換期をなすものは一九二〇—二一年であると述べてゐるが、彼は實證的研究の結果、二三の例外を除いて他の諸資本主義國は孰れも前轉換期一八五六年以降に現はれたる轉換期は一九二九年であつて、一九二〇年以降に於いては一般に漸高の傾向が現はれてゐる。この事實は單に卸賣物價全體に就いてのみならず各種の物價を取つて見るも大體同様

の傾向を示してゐる。唯小賣物價の如きには伸縮性の多少異つたものが發見せらるゝも、然し、それは從前の經驗からしてA・B間の特徴に屬する。其の他土地家屋の如き持續財に於いても、孰れも其の騰勢を止め更に低下の歩調を示してゐる。この事實はAよりBへの轉期の特徴である。且つ又、經濟生活の高度化とともに、重要な證券相場とともに株式相場は、明に一九二〇年より二九年迄に高騰し、其の水準を維持してゐるのであつて、一九二九年に這ると共に斷然下落してゐることも一特徴である。以上の價格運動のみではなく、生産・分配の機能上の諸事實を顧みても、孰れも一九二八—九九年に於いて經驗上B局面に這つてゐる。更に又、經濟組織の機能の一般的事實に於いてもAよりBへの轉向の指標はよく現はれてゐる。次に、最近に於ける國際間に於ける經濟的關係は戰時或は其の後に於ける如く、著しく相反撥し、制限せられ、各國民經濟は自國を防衛するかたはら、有利なる外國販路を擴張しやうとする。かゝる傾向は、經驗上Bに現はるゝ一般的傾向であると思はるゝ。又、生産と消費との一般的均衡の失墜の事實は又長期波動の轉期を示す他の指標である。次に、前述の様に、諸原因中最も中心的なる貨幣側に於いて轉期は國によつて遲速があつた。即ち、從來の金融的優越的地位を急速に取戻し得ると信じたものに對して遅く、又法外に通貨を亂發したる國に於いても同様であつた。これに反して、賠償債權の有利なる辨濟によつて、多額の金を取得したる國は自動的に活動力を維持した。總て此等の特徴は現下の比較的重要なる情勢の變化と、これに續く多少とも持續的な結果をも明に示すものである。金生産は一九〇〇—一〇年、一九一〇—二〇年に於けるよりも減少してゐる。而して、貨幣及通貨の増加の率は低下し、信用も漸次に低下し、景氣後退に拍車をかけつゝある。最後に次の如く結論してゐる。「大體に於いて現在の世界經濟は、第二の形態或はB局面に入るか既に入つてゐるし、又、現在の世界恐慌は主要なる諸特徴を以つて、長期波動に於けるA局面よりB局面への轉期を表明してゐる如く

である。彼は斯様な長期波動理論の立場からして現在行はれてゐる恐慌原因論や對策に就いて若干の批評を試みてゐる。それ等の詳細に亘つてこゝに紹介することは冗長となるので省略するが、唯全體を一瞥して、其の重要なもの換言すれば彼の波動説を積極的に明にする何等かの要素を包含するものを内容を明にしたいと考へる。

彼は一九二〇年を轉期とする長期波動説を否定し、進んで高賃銀論(Filene, Ford.)及高賃銀反對論(Rueh.)を以つて總て事實と符合せられ虚説であるとなし、更に又、戦争や財政や國際間に於ける財政的關係の如き外部的事情に恐慌因をもとめやうとする説を却けたる後、金分配に於ける最近の變動に就いて一般に行はれてゐる所論即ち金の再分配を以つて恐慌對策とするものを検討する。彼は勿論貨幣手段の増減を以つて經濟的活動の伸縮の基本的條件となるものではあるか、それは貨幣手段の絶對的、相對的分量ではなくして、該手段の増加率に於ける變化である。されば、金再分配は金の世界的増加率を變化するものではなく、ビールに與へる爲めにビールより奪ふに外ならぬ。而して其の結果は恐慌の影響の軽い地方をして一層惡せしめるに外ならぬ。斯様な立場からして國際聯盟其の他に於いて主張せられる金の正常的或は平均的發展説を否定する。かゝる説明は、事實と相反する原理自體を現はしてゐるに過ぎぬのであつて何等現實的なものではない。現實は、金の増加及減少期の交替であつて、然も經濟的發展に於いて主要な役割を演ずるものはこの交替期に外ならぬ。

以上の外恐慌對策に關する彼の所論に就いては略することとする。

要するに彼の所説は金融的景氣理論に屬すべきものである。而して、物價と貨幣供給量との機械的關聯の考察のみに陷ることなく、多少とも有機的に説明してゐる點は、數量說の見地を一步進めたものである。

前述の様に彼の所論は表現が不満足なるのみならず、其の内容が、一面に於いて、餘りに錯雜で波あるといふに他面に於いて餘り簡略であつて、全體が不完全なることは彼の認めてゐる所であり、そは、單に長期波動説に關する草案及び暗示を與えるに外ならぬ。従つて、今後同著者によつて一層完成せられた勞作の發表を期待することが出來やう。斯様な事情であるが爲めに本書の紹介に當つても筆者が前後の關聯を付けて紹介した點も尠くないのであつて、それ等の點に就いては今後同著者の發表を待つて、更に糺したいと考へる。